特257
339

菅原時保禪師

碧巖錄講演（第二十）

始

特257
339

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十）

昭和十四年
十八
寺務所

碧巖錄講演 其二十 目次

第五十一則　雪峰是什麼……一頁
第五十二則　趙州渡驢渡馬……二八頁
第五十三則　百丈野鴨子……四〇頁
第五十四則　雲門却展兩手……五七頁

碧巖錄提講

第五十一則　雪峰是什麼

◎垂示

垂示云、纔有是非、紛然失心、不落階級、又無摸索、且道、放行即是、把住即是、到這裏、若有一絲毫解路、猶滯言詮、尚拘機境、盡是依草附木、直饒便到獨脫處、未免萬里望鄉關、還構得麼、若未構得、且只理會箇現成公案、試擧看、』

讀方

垂示に云く、纔に是非有れば紛然として心を失し、階級に落ちざれば、又摸索無し。且く道へ、放行するが即ち是か、把

住するが即ち是か。這裏に到つて若し一絲毫の解路有らば、猶言詮に滯り、尙機境に拘はり、盡く是れ依草附木ならん。直饒便ち獨脫の處に到るも、未だ萬里に鄕關を望むことを免れず。還、構得するや。若し未だ構得せずんば、且く只箇の現成公案を理會せよ。試みに擧す看よ。』

字解及び分解。

纔有云々は鑑智禪師の信心銘より出したもの。既に第二則に此の意味を出しておきました。故に心ある人、參照すべし。』是非は善惡。寸毫も是非善惡に亙らば絕對的の本心は滅茶々々になる。要は是非善惡の差別に處して絕對的の本心を亂さゞるに

あり。――不落階級、階級は差別、相對、不落であるから、差別、相對に依らず、と云ふ意なり。』――無摸索は摸索不着と同意。俗に、とりつく島がないと云ふこと。』――放行は許すこと。把住は不許のこと。又は第一義、第二義として用ひることもある。許す時もあり、許さぬ時もあり。時に順應せざる放行、把住は何れも不可なり。』――這裏、此の處では、放行にすべきか把住にすべきか、何れに決定すべきや、と云ふ心。』――解路は理解、理意、道理と見るべし。』――機境は機會、境遇、又は場合、時機、都合。』――依草附木は、獨立の出來ぬ靈魂、亡靈と云ふ程のこと。』支那の古代人は、人間の

亡魂は地獄又は極樂に行く、然るに禽獸の亡魂は草木に附着す、と信じて居る。敢へて死してからでなく、死せざる今日も死せる亡魂の如く、獨立獨行せずして何ものかに依寄せざれば事をなし得ざる人がある。それらは依草附木の精靈である。』――獨脫は非凡又は拔群、越格。何れも顯然と頭角を表現したる境致。――鄉關は自己の故鄉、出生の處。本地の風光とも本分の田地とも云ふ。』――構得麽、合點が出來たか、――呑みこめたか、――臍おちがしたか、と云ふ位の事。』――

提講。

眞理とか大道とか、又は神の眞體、佛の面目、それらは元來相對的でなく絕對的のものであるから、是だの非だの善だの惡だの、と云ふ相對的の分別思慮を以て把住しようの、解得しようの、と如何に頭腦を勞しても、それは畢竟無駄事。却つて迷霧を增し疑雲を深からしむるお手傳ひだ。――眞理は是が爲に隱れ、大道は是が爲に死す。神や佛は是が爲に其の本體を秘し其の面目を覆ふ。――とは云ふものゝ、眞理や大道、神や佛、それが如何に絕對的であつても其の元をたゞせば自己を除いて他にあるに非ず。――されば不可得底を可得し、不明白底を明白にせんと要せば、蓋し其の方法に依らざるべからず。其の順序を踏まざるべからず。其の方法に依り其の順序を踏ま

ざれば總て是れ摸索不着。何が何やら五里霧中に終る。――

五里霧中の不得要領では一切衆生濟度は出來ぬ。苟も一切衆生を濟度せんと欲せば、放行の第二義に依るべきか把住の第一義を用ふべきかを分明にせざるべからず。之是の放行、把住、そのもの、それに於て聊かでも不可得、不分明であれば、天地の造化、神佛の言教、それに滯りそれに拘はることになる。多少なりとも言詮に滯り機境に拘はらば、一切の活句が死句となり、一切の活動が死動となる。之是を依草附木の精靈と云ふ。』

諸君、依草附木の精靈となる勿れ。――圜悟禪師、言を改め大衆に向つて曰く、「直饒獨脫の處に到るも未だ萬里鄉關を望むことを免れず。」と。是は圜悟禪師の見識。佛祖と雖も近傍せしめざる處。諸君、還つて構得すや。了解が出來たか。了解が出來たら造作の機境に拘はらず佛祖の言教に滯らず、其の時、其の場、其の位に於て、放行すべきには放行、把住すべきには把住、横拈倒用、自由自在、意に任せ氣に隨ひ、なすべし行ずべし。」若し然る能はざる人は古人の公案を參窮すべし。

◎本則

擧、雪峰住庵時、有兩僧來禮拜、峰見來、以手托庵門、放身出云、是什麼、僧亦云、是什麼、峰低頭歸庵、僧後到巖頭、頭問、什麼處來、僧云、曾到雪峰麼、

僧云、曾到、頭云、有何言句、僧舉前話、頭云、他道什麼、僧云、他無語低頭歸庵、頭云、噫、我當初悔不向他道末後句、若向伊道、天下人不奈雪老何、僧至夏末、再舉前話請益、頭云、何不早問、僧云、未敢容易、頭云、雪峰雖與我同條生、不與我同條死、要識末後句、只這是、

讀方

舉す。雪峰、住庵の時、兩僧の來つて禮拜せしこと有り。峰、來るを見て、手を以て庵門を托して、放身して出でゝ云く、「是れ什麼ぞ。」僧も亦云く、「是れ什麼ぞ。」峰、低頭して庵に歸れり。僧、後巖頭に到る。頭問ふ、「什麼の處よりか來る。」

僧云く、「嶺南より來る。」頭云く、「曾て雪峰に到りしや。」僧云く、「曾て到れり。」頭云く、「何の言句か有りし。」僧、前話を舉す。頭云く、「他は什麼と道ひしや。」僧云く、「他は無語のまゝ低頭して庵に歸れり。」頭云く、「噫、我、當初他に向つて末後の句を道はざりしことを悔ゆ。若し伊に向つて道ひたりしならんには、天下の人、雪老を奈何ともせざりしものを。」僧、夏末に至つて、再び前話を舉して請益せり。頭云く、「何ぞ早く問はざりし。」僧云く、「未だ敢へて容易ならず。」頭云く、「雪峰我と同條に生ぜりと雖も、我と同條に死せず。末後の句を識らんと要せば、只這是。」

字解、分解。

雪峰住庵、唐の武宗皇帝が會昌年間に廢佛の勅令を發し、天下の寺を毀ち僧を逐うた。其の時、雪峰義存は嶺南の地に隱れ、小庵を結んで居られた。それを雪峰住庵と云ふ。」言ふ迄もなく雪峰は巖頭と共に德山禪師の弟子。巖頭は雪峰の師兄である。

――巖頭は此の當時、世を避けて鄂渚湖と云ふ湖水の渡守になつて居つたと云ふ。』――托、おす、托開とあるからオシ開クこと。』――放身、大手をふつて出たこと。』――到巖頭、或人は云ふ、巖頭は既に渡守をやめて鄂州の巖頭に住居しての時である、と。或は然らん。』――曾到雪峰麽、「此の雪峰は

閩の雪峰でなく嶺南に於ける雪峰の隱棲地と見るべし。」と井上君は云ふ。』無論さうである。意は、嶺南地方から拙僧の處まで來る途中、閩の雪峰義存に會うて來たか、と云ふことになる。」當初、そのかみ、と讀むべし。その時、その折、である。――末後句、文字の通り最後の言葉、今日で云ふ最後の斷案、最後の通牒に當る、と井上君の說。』――一口に、大悟徹底の一句、と云ふ人もある。敢へて造作に亘らず手輕に、おわかれの言葉でよろしい。――請益、もう少々平易に、もう少々微細に、と云ふ意味。出處は論語にあります。』――未敢容易、思索のことでなく、時間に關し多忙と云ふことである。』――雪峰雖

與我云々、簡單に云へば、拙者と共に師を同じうして修行をしたが、今はお互に東西に別れてをる、故に始あつて終なしさ。』――要識末後句、それより外に最初の句も末後の句もあるものか。それ〳〵それだけだ。』――

提講。

英雄も時を得ざれば身を山間幽谷に隱し時節到來を待つより外に道なし。」正受老人の如きも然り。孔明の如きも亦然り。正受老人は白隱の訪問に逢うて其の光輝を發し、孔明臥龍は三顧を得て其の爪牙を顯はす。雪峰義存禪師は兩僧の來參に依つて其の面目を呈す。――若し不幸にして正受老人、白隱の訪問なく、孔明臥龍、三顧の禮なく、雪峰禪師、兩僧の來參なければ、所謂寶の持腐り、世に於て何の益かあらん。然るに天道由來、私なく四時順環、時節は自然に到來。』本則にある雪峰の如きは、佛敎大迫害を蒙り、それが爲に餘儀なく嶺南の或る處に孤獨の住居をなしつゝありし。然るに兩僧の訪問に逢ふは、偶然にして偶然に非ず、所謂天の賜物、是ぞ時節到來。――雪峰禪師、此の機、得がたし失ふ可からず、と云ふ意思が或はあつたであらうか、と思はるゝ節なきにしもあらず。――雪峰禪師、遠來の兩僧が訪ひ來るを見て、速に庵門を托し身を放つて、「是れ什麽。」と、――光輝を閃かした。――圜悟禪師は

訪問の兩僧 禮拜する處へ、「什麽をかなす。」と咎められた。衲は、雪峰の身を放つて「是れ什麽。」と云ふ處へ、「それは何だ。」と云うてやりたい。――――圜悟禪師は「無孔笛。」と下語をなされた。衲は「是れは〳〵。」と云ふ。衲と圜悟と是れ同か是れ別か。――――訪僧は雪峰禪師に「是れ何ぞ。」と順應した。可謂、舊參の破衲子、と。――――普通の禪僧であるなら、雪峰禪師に機先を制せられたら、それに氣を呑まれ、如何ともなし得ざる處。――――然るに流石は舊參底、おめず、おくせず、鸚鵡返しに「是れ什麽。」と賊馬に乘つて賊を逐ふ處は如何にも見上げたもの。――――圜悟禪師は例の抑下筆法を以て、泥彈子、と喝破なされた。泥を丸めて、それを投げつけても、役にはたゝぬ。何故ならば、雪峰禪師は氈柏板だ。如何に打つても鳴るものか。達磨であれば不識と云ふ處。――――雪峰禪師は無語低頭歸庵、是が雪峰禪師の末後の句。――――無語を無語と思ふべからず。故に圜悟禪師云く、「爛泥裏に刺あり。」更に語を添へて、「龍の足なきが如く蛇の角あるに似たり。」と。油斷するな。――――流石の兩僧も雪峰の無語低頭歸庵に逢うては口の下しやうも手の出しやうもない。只茫然たるのみ。是が或は兩僧の末後の句ならん。

――――

以上、雪峰禪師と兩僧の問答商量は終りを告ぐ。』兩僧、更に

錫を轉じて巖頭の處に到る。大内君は、「兩僧は雪峰から巖頭あての書翰を持つて居たと云ふことであるから、雪峰から門前拂ひを喰つただけでなく、幾分か隨身して居たことが見える。」と云うて居らるゝが、衲の淺見では果して然るや否は知れぬ。とにもかくにも巖頭の處へ行きしことは確實である。頭云く、「君等は什麽の處よりおいでである。」地理上の問ではない。參得底の道程を問うたのである。故に圜悟禪師は注意して云く、「須く作家にして始めて得べし。」と。兩僧、恁麽の意旨を知るや知らずや。曰く、「嶺南より參りました。」――正直に答へた處に兩僧の凡僧ならざる處が見える。圜悟禪師曰く、「還つて雪峰を

見るや。」と。老婆親切、見たと云うても不可、見ずと云うても不可。――頭云く、「曾て雪峰に到るや。」拙僧の同窓、同火の友たる雪峰の處へ往かれたか。――是に依ると大内君の書翰云々は多少の疑なき能はず。それはそれとして、巖頭は弟を思ふと共に此の兩僧が如何なる修行をしてをるかを試驗するのである。兩僧云く、「曾て到れり。」實頭の漢、當時稀に見る人。――正直だからとて必ず修行が進んで居るとは云へぬ。頭云く、「何の言句ありしや。」何か君等に對して、ためになる話でもして聽かしたか。僧、前話を擧す。先に雪峰禪師に逢うた次第を一々説明した。圜悟禪師、兩僧に向つて、「重々の敗闕だ。」と。

如何にも重々の敗闕である。――――衲ならば三十棒を呈する處だ。――――頭云く、噫我云々。「是は實に慈悲甚深たる一大公案。輕々に看過すべからず。」と古人が口を極めて云うて居らるゝ。果して然るや否やは實參實證して始めて知るべし。』――――兩僧、憶へらく、「我等は雪峰禪師の處に於て既に是れ什麽底を充分に悟得し了れり。故に巖頭のお手元拜見と殊更に來りしに、此の語を聞き末後の句そのものゝ更に深遠なることを知れり。」と。茲に錫を留め一夏九十日の間、修行に骨を折りしは、實以て仰ぐべし愛すべし而して又學ぶべし。――――兩僧、夏末に至り再び前話を擧して請益す。末後の句につき、「もう少々微細に

お示しを。」と出て來た。――――頭云く、「何ぞ早く問はざる。」一夏九十日の安居中、何をグヅ〳〵してをられた。徒に妄想堆裏に起居し他の信施を貪つてをられたか。――――圜悟禪師は兩僧に代つて、「我ならば、何ぞ早く問はざる、と云ふ言葉の未だ終らざる中に、禪床を掀倒し、シタ、カ痛い目に遭はせてやつたものを。」と云うて居らるゝが、局に當る者は迷ふて、傍觀者の云ふやうに出來るものではない。――――由來實戰は論戰とは別。蓋し知る人ぞ知る。學者輕々に人の舌頭に上り妄動すること勿れ。』――――僧云く、「未だ敢へて容易ならず。」是れ二義あり。其の一は、曰く、「末後の句そのものに工夫を重ねましたが、

何ともラチがつきません。依つて請益を願ふ次第であります。」其の二は、曰く、「老大師は日々接化利生に御多忙、我等は日々の作務に忙殺され、是が爲に思ひながら今日まで延引になりました。」以上の二義、是と云へば是、不是と云へば不是。何が故に牛の飲む水は乳となり蛇の飲む水は毒となる。要は用ふる其の人にあり。用ひらるゝ其の水にあらず。學者、問僧となりて自知すべし。――頭云く、「雪峰云々より只這れ是れ。」に到るまで、一括すれば左の如し。

雪峰と拙僧は同じく德山門下で悟つた故に其の見所に於ては毛頭差別なし。されど爲人の手段、利生の方便は各々其の特色あり。隨つて宗風も亦自ら同じからず。錦上に花を添ふあり。綿裏に毒石を包むあり。故に知るべし末後の句も亦同一ならず。同一ならざる處に眞箇の末後の句がある。眞箇の末後の句を知らんと要せば只這是だ。――只這是だ。――其の時、其の處、其の位、それ〳〵に順應して、それ〳〵に逆對して、只這是。――諸君、末後の句がわかりましたか。――わかつても、わからんでも只這是。――

◎頌

末後句、爲君說、明暗雙々底時節、同條生也共相知、不同條死還殊絕、還殊絕、黃頭碧眼須甄別、南北東西歸去來、

夜深同看千巖雪、』

讀方

末後の句、君が爲に說かん、明暗雙々底の時節に。同條生は共に相知、不同條死、還つて殊絕、還つて殊絕なり。黃頭も碧眼も須く甄別すべし。南北東西歸去來。夜深けて同じく看ん千巖の雪。』

字解、分解。

明暗は、晝と夜、白と黑、其の他一切の相對を含有して居ることと知るべし。』――雙々は並ぶこと。明と暗と、白と黑と、右と左と、寒と暑と、又は有形と無形、平等と差別、――雙

明雙暗とも云ふ。』――相知は知音同士、知己同士、本是同根生。所謂、機々相應、句々相投、それである。』――殊絕は、非常に優逸、――意外に淸美。』――黃頭は釋迦如來のこと。何が故に黃頭と云ふ。其の義は他の人に問ふべし。』――碧眼は達磨大師のこと。達磨大師は、眼、碧色であつた。』――甄別は辨別、よく見わけること。』――南北東西は字の如く東西南北、四方の人と云ふ意なり。是は雪峰の境遇を述べ併せて學者に及ぶ。』――歸去來、是は陶淵明の歸去來辭に出て居る句。かへりませう〳〵、と云ふこと。』――千巖は象骨山を指したものならん。敢へてそれに限らずともよろしい。

提講。

末後の句は本則の眼目。故に雪竇禪師、第一に末後の句と拈出された。眞に然るべきことである。さうなければならぬ。是で本則を拈提し了れり。』――以後は末後の句の説明。あれども實はなきに如かず。寧ろ閑言語である。』「サア此の末後の句を如何にも玄妙にして且つ不可思議なるものと思うて、非常な好奇心を以て聞きたがるから、諸君のために試みに説いて見ませう。」と云うた雪竇禪師に向つて、圜悟禪師が、「舌頭落地。」イヤ説くべきものでない、説いたら舌が抜けてしまふぞ、と。』果して末後の句は恁麼なるものか。衲は然らず。語れ語れ、説け説け。語つて語り盡せ、説いて説き盡せ。雪竇禪師は衲の後援を得て末後の句の説明を始められた。

明暗雙々底時節、時節と云うて別に時節はない。いつも〳〵の時節だ。晝は晝の時節、夜は夜の時節、春は春の時節、冬は冬の時節。而していつも〳〵明暗雙々ならざるなし。其の一例として雪峰、巖頭の心境を擧揚して見よう。同條生也共相知、雪峰と巖頭、德山下で共に悟つた故に同條生也。――お互が知音知己である故に共に相知。――之是が明暗雙々底、されど雪峰は雪峰、巖頭は巖頭。一樹春有兩斑、南枝向暖北枝寒、で各々同じからず。故に不同條死。――而して此の不同の處が

妙のある處にして玄の存する處。還殊絶、之是は雪竇禪師の明暗雙々底。還殊絶である。――更に言葉を進めて曰く、「黄頭碧眼須甄別。」サア此の不同條死は容易に知ることは出來ぬ。釋迦でも達磨でも、注意に注意を加へ用心に用心をしないと、見そこなふぞ。知りそこなふぞ。――況んや其の他の人に於てをや。老胡の知を許して老胡の會を許さずだ。』――東西南北歸去來、還殊絶、白雲深處金龍躍、碧波心裏玉兎驚、で、見にくい〳〵、知りにくい〳〵。見んと欲すれば白雲萬里、知らんと欲せば忽焉として影を隱す。故に雪峰は無論のこと、其の他の人も歸りなさい、歸りなさい。自己の家山に歸り須く聖胎長養すべし。聞かずや、途路雖好、不如歸家。』――夜深同看千巖雪、是が明暗雙々底の好風景、雙美、雙善、雙眞。――眞夜の暗中に雪の白漫々。それ〳〵だ。その外に何もなし。吾醉將眠君且去、明朝有意携琴來。――馬上相逢無紙筆、憑君傳言報平安。――江間波浪兼天涌、塞上風雲接地陰、――でもよい。――咄、語れば語るほど、說けば說くほど、其の實に遠ざかり其の理に離る。故に夜深同看千巖雪、と再三朗吟して其の妙を知り其の玄に達すべし。夜深同看千巖雪。』――

（昭和十三年十月二十二日講演）

第五十二則　趙州渡驢渡馬

古人云く、一向爲人不知有己、と。之是を以て趙州禪師を評すべきか。禪師の如きは自己を忘れて度生三昧、常に恒に、灰頭土面、和泥合水、所謂、隨機說法、應病與藥。蓋し尋常一樣の人のなし能はざる處。然るを平生の茶飯底の如く輕々になし得て更に造作の痕なし。可謂、佛門の大英傑、禪家の大偉人、と。果して恁麼なりや否を知らんと欲せば去つて本則に參ぜよ。

◎本則

擧、僧問趙州、久響趙州石橋、到來只見略彴、州曰、汝只見略彴、且不見石橋、僧云、如何是石橋、州曰、渡驢渡馬、

讀方

擧す。僧、趙州に問ふ、「久しく趙州の石橋と響きたるも、到來すれば只略彴を見るのみ。」州云く、「汝、只略彴を見るのみ、且つ石橋を見ざるなり。」僧云く、「如何なるか是れ石橋。」州云く、「驢を渡し馬を渡す。」

字解、分解。

石橋、三石橋あり。云く、天臺山。云く、南岳。云く、趙州。』趙州の石橋は趙州從諗禪師の住して居らるゝ、觀音院の趙州城の東十里の處にありと云ふ名處である。』――響、音に名高い、

高名赫々、よく聞いてをる。』――略、獨木橋、一本橋のこと思うて居るが、井上君の説に依ると、「一本橋、丸木橋では馬や驢は通れぬ。こゝにある略約は、溪流に大小の石を丁度日本の庭園のトビ石のやうに配置して、徒渉に便にしたものである。」と。或は然らん。事實は事實に隨ふべし。今は事實をかりて其の意を採るのである。故に橋の大小、其の廣狹は問ひません。

提講。

是を借事問と云ふ。石橋に事よせて趙州禪師の見所を勘檢しようと云ふのである。故に此の問僧は多少見識を所有せしものか或は似て非なるものか。――趙州禪師の如き一流大家の面前に出ては、如何なる者でも所謂日下の燈で、光りが極めて薄い。』――一僧あり、遠路得々、趙州禪師の處にやつて來て、「禪師、私は趙州の石橋々々と云ふことをかねゞ聞いて居りました。無論有名であるから、驚くほど巍々堂々たる立派なものと理想もし敬慕もしてゐました。只今親しく石橋を拜見して意外々々。是が有名な石橋で御座るか。子供が戯れに造つた樣な略約ではありませんか。」――百聞一見に如かず。聞いてビツクリ見てビツクリ。此の樣なことゝ知つたら貴重の時間を費やして訪問するのではなかつた。後悔々々。』――「來て見れば

さほどでもなし富士の山、釋迦も達磨もかくやあるらん。」と云ふ歌がある。此の問僧、橋の平凡なるを見て、趙州禪師の禪定力も風聞ほどではないな、と暗に推知したらしい。――それが修行未熟の處だ。衲なども若き時は屢〻此の問僧と同一の轍を踏んだものだ。――州曰く、「汝只略彴を見て且く石橋を見ず。君は痩せた老僧の外形だけを見て眞箇の趙州を見透する眼力をもたぬな。――一本橋を見て、其の周圍に自然の草木巖石が云ふに云はれぬ調和をしてをる、其の大石橋が見えぬか。――流石唇皮禪を以て四海に鳴り渡りし禪師だけあつて、其の言、簡にして要を盡し、其の語、短にして意長し。――衲が如きは極めて凡僧であるから是非なきことである。問僧問客に逢ふごとに、喃々喋々と長時間に亘り强ひて玄を說き妙を語る。されど、とゞのつまり不得要領に終る。』――問僧、修行未熟の證據、果然趙州禪師の釣針にかゝつた。――僧云く、「如何なるか是れ石橋。」と。笑ふべし、牛に騎つて牛を尋ぬる底の漢。此の問僧は石橋と略彴と二物を對待して居るから揀擇取捨の念が起る。その樣なことで趙州禪師を勘檢しようなぞとは、天に向つて唾する樣なものだ。――略彴の外に石橋なし。石橋の外に趙州なし。――州曰く、「驢を渡し馬を渡す。」石橋か。其の石橋は驢も渡せば馬も渡す。馬が渡つてもよし驢が渡

つてもよし。必ずしも馬と驢に限つてはをらぬ。天子も渡る、乞食も渡る。上根の人も下根の人も、渡る渡る。佛も神も兎も蛇も犬も猫も渡る。――　日月星辰も森羅萬象も渡る。此の橋を渡らざるもの、古往今來一個半個もあることなし。――　之是が趙州禪師の石橋の一見同仁、一味平等の處である。――　お互も石橋になり、趙州禪師の如く一見同仁、一味平等の禪定力に依り、一切衆生を濟度せざるべからず。畢竟如何。曰く、驢を渡し馬を渡す。――

◎頌

孤危不立道方高、　入海還須釣巨鼇、　堪笑同時灌溪老、　解云勞箭亦徒勞、』

讀方

孤危、立せざれども、道方に高し。海に入らば、還、須く巨鼇を釣るべし。笑ふに堪へたり同時の灌溪老。勞箭と云ふことを解せしも亦徒勞なりき。』

字解、分解。

孤危、峻嶮、――　銀山鐵壁、鐵壁銀山、寄りつき難き樣子。』

――不立は孤危を守らざる底。和泥合水、入鄽垂手、近づき易き有樣。』――　道方高、道德、德光、瞻仰すべき大人格者。表面は愚の如く、其の實は大なる偉人。』――　入海、問僧が趙

州禪師の底知れぬ禪海に沒入した以上、大魚を手に入るべきである。然るに折角趙州禪師を訪問して徒らに略彴を見て石橋を見ずとは殘念至極。』――――鼇は海中の大龜。列子と云ふ本にある故事。崙崑山上の北方九萬里の處に龍伯國と云ふ國があり。その國に身長四十丈もある大男が居た。此の人が支那の國（五山の所）に三足か四足で歩いて來て、一釣に六疋の大鼇を釣り、直ぐにそれを肩にのせて歸つた云々、とあります。」問僧の如きは小男であるから、百足歩しても千足歩しても高が知れたもの。（見所のことを云ふ。）故に巨鼇を釣り得ざるは理の當然である。諸君は小男か大男か。――――衲の如きは極めて小男であ

る故に、禪海の性波に出沒して未だ曾て巨鼇を釣り得ざるのみか小魚すら釣り得ない。』――――同時は同時代。――――灌溪老は臨濟義玄の弟子、志閑禪師のことである。趙州禪師と同時代の人。雪竇禪師が趙州を讃歎する都合上、此の人を引合に出して比較したのである。灌溪老こそ迷惑千萬である。されど趙州禪師の爲とあれば喜んで云ふがまゝになつて居らるゝ處に灌溪老の賞讃すべき處がある。お互に採つて以て手本となすべし。』此の本則と同じ樣に灌溪老にも問答があつた。或僧が灌溪老に問うて曰く、「久しく灌溪と響く。到來するに及んで只箇の漚麻池を見る。」――――（漚麻池とは僅に麻をひたすほどの小さな池の

こと。）灌溪老曰く、「汝は只瀝麻池を見て且く灌溪を見ず。」僧云く、「如何なるか是れ灌溪。」――――灌溪老、「劈箭急なり。」と威張つた答をなされた。そこを拈起し來つて、雪竇禪師が堪笑同時灌溪老、解云劈箭亦徒勞、と。言葉は平易であつても意味は透る。寧ろ平易の方が言淺うして意深しだ。趙州禪師の如きは平易も平易、極めて平易、驢を渡し馬を渡す。――――然るに灌溪老は殊更に平素用ひざる文字を拈出して、劈箭急なり、と云はれた。（敢へて然るに非ず。蓋し偶然ならん。）文字學者には多少愛せらるゝかも知れぬが、禪機、禪味に取つては勞して功なし。畢竟骨折損である。（骨折損も時に依つては必用である。）是も一時、彼も一時、と云ふことがある。無暗に人の口端に乘つて眞意のある處を失却してはならぬ。要する處は趙州の心も知り灌溪の心も知り、而して雪竇の心も知らざるべからず。

茲に人あり、來つて衲に、「久しく鎌倉と響く。到來すれば鎌も見ず倉も見ず。」と云うたとき、衲は如何に答ふべきや。諸君、試みに衲に代つて答へ來れ。――――衲は云く、「鎌倉と聞いて極樂、見て地獄、慈悲なき里に寺の多さよ。」と。――――

（昭和十三年十一月五日講演）

第五十三則　百丈野鴨子

◎垂示

垂示云、徧界不藏、全機獨露、觸途無滯、著々有出身之機、句下無私、頭々有殺人意、且道、古人畢竟向什麽處休歇、試擧看、』

讀方

垂示に云く、徧界不藏、全機獨露。途に觸れて滯ること無ければ、著々と出身の機有り。句下に私無ければ、頭々に殺人の意有らん。且く道へ、古人畢竟什麽の處に向つてか休歇せし。試みに擧す看よ。』

字解、分解。

徧界不藏、全機獨露、徧界は十方世界に徧く滿ちてをること。徧く滿ちて居るまゝ、それを不藏と云ふ。その不藏の當體が全機獨露である。看よ天に顯るゝ日月星辰、地に顯るゝ草木山川、それが天地の本體にして宇宙の妙用である。その妙用、その本體が、古往今來、無言にして活動し、無作にして活轉す。見て知るべし、採つて味はふべし。』――　觸途、隨處隨時、如何なる場合に於ても。』――　著々、一々、事々物々、それを自由自在に、思ふがまゝに。』――　出身之機、事々物々、それに對し、

そのものそれと一體になること。所謂任運從容。云ひ換へれば自己なきこと。自己なき時、一切自己ならざるなし。』――句下、必ずしも言句文字ではない。一擧手一投足、一咳一唾、是が活句ともなり、死句ともなる。活句に參ずべし。死句に參ずる勿れ。活句を吐くべし。死句を吐く勿れ。――活句は無私、死句は有私。――死句は人を殺し、活句は人を生かす。否、天地一切を殺し、乾坤全部を生かす。』――頭々、箇々に同じ。一切の事物を云ふ。――殺人意、單に法律家の云ふ殺人と見るべからず。殺人の下へ活人の二字を入れて見るべし。殺すも生かすも、その場〳〵に於て自由自在。』――休歇、大安心、――大悟底。――用事がすんで大いにひまになつた。』

提講。

宇宙の眞理、神佛の實體、それは決して自己以外にあるものに非ず。自己そのものが即宇宙の眞理、神佛の本體である。故に宇宙の眞理、神佛の本體を知らんと欲せば、先づ以て自己の眞理、自己の本體を窮めざるべからず。看よ、自己の眞理は徧界不藏、首を擧げて山月を望み、――自己の本體は全機獨露、首を垂れて故郷を思ふ。――恁麽は不動の眞理にして、恁麽は不變の事實である。――故に苟も禪僧たるものは此の處を

手に入れ、如何なる場合に臨んでも寸毫の滯りなくすら〳〵と當所に所理することが出來る。それを、著々出身の機あり、と云ふ。言句に於ても亦然り。舌頭骨なく、寒に逢うては寒、暑に逢うては暑、私心私見を挿まず、總てに於て公平、一切に對し平等、天眞自如、本體如然であれば、頭々殺活自在の妙機妙用を發揮することが出來る。眞箇恁麼の眞境に達したる人の休歇底は抑〻如何。それは本則に參得して知るべし。』

◎本則

舉、馬大師與百丈行次、見野鴨子飛過、大師云、是什麼、丈云、野鴨子、大師云、什麼處去也、丈云、飛過去也、大師遂扭百丈鼻頭、丈作忍痛聲、大師云、何曾飛去、』

讀方

舉す。馬大師、百丈と行きし次、野鴨子の飛び過ぐるを見たり。大師云く、「是れ什麼ぞ。」丈云く、「野鴨子なり。」大師云く、「什麼の處にか去る。」丈云く、「飛び過ぎ去るなり。」大師、遂に百丈の鼻頭を扭る。丈、忍痛の聲を作せり。大師云く、「何ぞ曾て飛び去りしや。」

字解、分解。

馬大師は馬祖道一禪師のこと。第三則の處に略歷を添へておきました。』――百丈は百丈懷海禪師のこと。第二十六則の處

に述記しておきました。兩人は師弟であります。』――――行次、行くとき、歩行しながら。』――――野鴨子、かも。衲は曾てより耳には聞いて居るが、實際、眼に見たることなし。故に、かも、と云うても、犬に似て居るか馬に似て居るか知りません。人の口まねをして、かも、と云ふのであります。禪に於ても亦然り。人が禪と云ふから禪と云ふものゝ、禪を事實に研究しない人は、「禪は默然端坐することである。禪は其の場〳〵で活脫の働をなすのである。否、禪は膽を据へ變に處して動ぜざることである。」と云ふ。何れも當らざること衲が鴨を見ずして想像の鴨を語ると同一。其の錯誤たるや笑ふべし。』――――去、飛びゆきしこと。』――――忍痛聲、痛いと叫ぶ聲。敢へて鼻に限らず。柱で頭を打つも痛いと叫ぶ。梯子段で向ふ脛をすりむいても痛いと叫ぶ。其の痛いと云ふ叫び聲のことだ。事實に忍痛の妙を手に入れんと欲せば、近前來、衲が馬大師になり、諸君の鼻頭を扭り上げて忍痛をお知らせ申しませう。――――決して遠慮は要りません。至つて容易なことです。』――――何曾飛去、「飛び去つたと云ふが、こゝに居る是は何だ。百丈、おまへか。是は失敬。」と云ふ處である。――――

提講。

散策の序に野鴨子を相手に禪機を弄した一つの話が茲にあ

る。師匠の馬大師と弟子の百丈、兩人が或一日、所謂野外散歩。――古人は造次にも茲に於てし、顚沛にも茲に於てす。で、師は人を作る三昧、弟子は學ぶ三昧。師學共に正念相續、歩々工夫を怠らず。時々公案を提ぐ。故に明投暗合する時節が自然に到來する。――今人は然らず。造次にも是を忘れ、顚沛にも是を思はず。師に馬祖なし、弟子に百丈なし。宗風の衰亡する、夫れ宜なるかな。――鴨が草叢に休息し、安眠を催して居る處へ、不時に人の聲がする。續いて人の足音がするから、鴨は驚いた。あわてゝ、バタ〳〵と飛んで行つた。――馬祖禪師、是を一見するや、百丈に向ひ、「あれは何か。」（馬祖、鴨

たるを知らざるに非ず。特に知らざるを裝うて問うた處に、弟子をして此事を發見せしむる活手段あり。）百丈、「あれは鴨と云ふ鳥であります。」是を、衆生顚倒、己れに迷うて物を逐ふ、と云ふ。――あれは鴨と云ふ鳥であります、と云ふ返辭を聞かされた時、馬祖の胸中は如何であつたであらう。嗚呼しまつた。無駄矢を放つた。――更に第二矢を放つて馬祖云く、「什麼處去也。」「どこへ飛び去つた。山へ飛び去つたか。海へ飛び去つたか。」と念を押された。此の一刹那に於て、飛び去りし鴨は如何なる鴨なるかに氣がつかねばならぬ處だ。殘念なことに鴨は

鴨、自己は自己、自己と鴨と全然別物なりと認識してをるから、丈云く、「飛過去也。」實際、鴨は飛んで行つたに相違ないから、鴨は向ふへ飛んで行きました、と云ふのは無理もないことである。――――されど、かゝる答では馬祖の滿足するはずはない。未熟の衲でも滿足はしない。況んや馬祖に於てをや。――――馬祖、「尋常一樣の手段では到底、百丈をして大悟せしむることは出來ぬ。是は一番、非常手段を下し百丈をして返省せしむるに如かず。」と云ふ大慈悲心から、大師遂扭百丈鼻頭で百丈の鼻頭を力まかせにキユーと扭つた。此の師であればこそ此の親切爲人の術が施さるゝが、普通一般の師では出來ぬ藝である。キユーと鼻頭を扭られたから、百丈ビツクリして、イタ〳〵〳〵ーと苦しまぎれに大聲をあげた。鴨が鳴いたのか、百丈が叫んだのか。所謂、說似一物即不中。――――馬祖云く、「何處飛去。」鴨は飛んで行つてはしまはぬ。こゝでイタ〳〵〳〵ーと悲鳴を放つて居るではないか。――――衲は一言馬祖に向つて云ふ、「門より入るものは家珍に非ず。自己の胸襟より蓋天蓋地にし來れ。」と。巖頭が雪峰に垂示せしを聞かずや。老婆談もほど〳〵にするがよい。由來天機は漏らすべからず。』されど嚴師好弟子を出す。――――咄、是も亦老婆談だ。――――

◎頌

野鴨子、知何許、馬祖見來相共語、話盡山雲海月情、依然不會還飛去、欲飛去、却把住、道々、』

讀方

野鴨子、知んぬ何許。馬祖見來つて相共に語り、話し盡さんとす山雲海月の情を。依然として會せず。還飛び去る、飛び去らんと欲せしも、却つて把住せらる。道へよ道へよ。』

字解、分解。

知何許、是は野鴨子の數を云ふのではない。野鴨子の何であるかを眞箇知る人が何人あるかと云ふのである。云ひ換へれば

知音稀なり。――釋迦も達磨も或は知るまい。知つたと云うたら不可、不可、大いに不可なりだ。』――見來、見つける、見出す。』――相共語、禪語の商量と見て差支はない。――心肝五臓を打あけて親しく話すこと。』――山雲海月情、是は知音と知音でなければ眞箇の處は知れぬ。文字の上で云へば宇宙の眞、善、美、であるが、實は父子不傳、佛祖不傳。』馬祖になれ。百丈になれ。百丈になれば海月の情が知れる。馬祖になれば山雲の心が知れる。三人龜を證して鼈となす勿れ。徒に他人の腹を忖度するを休めよ。』――道々、文字の通りサア云へ云へと鼻頭を扭つて鴨の鳴聲を聞かんと欲する底。――

提講。

野鴨子、雪竇禪師が例の空前絶後の筆法を以て野鴨子そのものゝ全體を露堂々に放出された。――之是の野鴨子、其の大を語れば方處を絶し、其の小を說けば無間に入る。馬祖も百丈も、雪竇も圜悟も、山河大地、草木瓦礫も總て一箇の野鴨子。――鴨と云ふ名のつけてある鳥の鴨を知らぬ人はない。が、盡乾坤、盡天地一箇の野鴨子であると云ふそれを知る人物は世の中に幾人ある。――云ふまいぞ、雪竇のみと。――馬祖も知つて居る。馬祖のみではない、百丈も知つて居る。故に相共に語ると云ふ。何を語る、山雲海月の情。――その山雲海

月の情とは抑〻如何なるものか。文殊の三昧、普賢知らず。普賢の三昧、文殊知らず。馬祖、百丈、兩人の山雲海月の情は蓋し兩人そのものが知るのみ。燈籠露柱と雖も察知することを許さず。』――馬祖の親心を子知らずで、百丈は舊に依つて相對堆裏に沒頭し、馬祖の心底を體得する能はず。故に依然不會、飛び去ると云ふ。飛び去ると云ふものゝ、鴨が一匹そこに居ることに氣がつかぬ。それを氣の毒に思うて、馬祖が秘藏の活手段を以て鼻頭を把住した。――可謂、一箭中紅心と。多少手に答へた。答へた如く百丈は感徹したか。――それが心配で心配でならぬ故に、死生を試みんが爲に最後の一擊を與へた。

サア道へサア道へ。――サア鳴けサア鳴け。鳴かずんば、鳴かして見せう。――鳴かずんば鳴くまで待ちやう。否、鳴かずんば殺してしまへ。――法の爲に自己を忘るゝことは馬祖大師のことを云ふならん。』苟も人の師となる者は馬祖大師の如く孤危峻嶮にして慈悲徹骨ならざるべからず。敢へて禪者に限らず。世間の人も亦復然りである。咄、長談は聽者の迷惑、即時下座。――

（昭和十三年十一月十九日講演）

第五十四則　雲門却展兩手

◎垂示

垂示云、透出生死、撥轉機關、等閑截鐵斬釘、隨處蓋天蓋地、且道、是什麼人行履處、試擧看、』

讀方

垂示に云く、生死を透出し、機關を撥轉すれば、等閑に鐵を截ち釘を斬り、隨處に蓋天蓋地ならん。』且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試みに擧す看よ。』

字解、分解。

撥轉は自由自在のこと。簡單に云へば活用である。』等閑は造作なく手輕に、と云ふこと。』――蓋天蓋地は天下何れの處に於ても處々眞々々々、それである。』――行履は境界と見て不可なし。』

提講。

圜悟禪師、會下の大衆に垂示して云く、「今に始まつたことではない。世の中の人間は、生とか死とか、それに擒はれて居るから、元來自由に働き得る本分を所持して居りながら强ひて窮窟して居る。――その窮窟を超出し生死の網を脫出し得て、自由自在の働をなさんと思はば、定惠共に研究せざるべからず。

定の力があつても惠の働が無ければ、體あつて用なし。惠の働があつて定の力がなければ用あつて體なし。故に禪定と知惠と二つながら雙修し、茲に始めて生死透出し機關を撥轉し、等閑に鐵を截り釘を斬り隨處に蓋天蓋地となることが出來る。

――抑〻鐵とは何ものか。釘とは何ものか。――無明煩惱、それである。（悟りもそれだ。）其の無明煩惱を、快刀を以て亂麻を切斷する如く、無字なり隻手なり一則の公案を上段にふりかぶり、拂ひ拂ひ拂ひ盡し、切り切り切り切り盡せば、處々眞、處々眞、隨處に主となり自然に蓋天蓋地が我ものになる。何と愉快ならずや。』――如是愉快の境界を手に入れ蓋天蓋地、隨處

隨時、大自在を撥轉なされし人は果して何人ぞ。それは本則に出て居る雲門禪師の如きが其の一人である。眞箇の處を知らんと欲せば去つて親しく雲門禪師と商量すべし。

◎本則

擧、雲門問僧、近離甚麼、僧云、西禪、門云、西禪近日有何言句、僧展兩手、門、打一掌、僧云、某甲話在、門、却展兩手、僧、無語、門、便打、』

讀方

擧す。雲門、僧に問ふ、「近ごろ甚麼の處を離れたるぞ。」僧云く、「西禪。」門云く、「西禪、近日何の言句有りし。」僧、兩手を展べたり。門、打つこと一掌す。僧云く、「某甲話在す。」門、却つて兩手を展べたり。僧、無語。門、便ち打せり。」

字解、分解。

此の則は雲門、西禪の二禪師と一人の僧とで出來て居ります。雲門禪師のことは改めて申し上ぐる必要なし。西禪禪師は南泉普願禪師の弟子。傳記は不明でありますが、可なりの人物らしい。

近離甚麼、この句は既に說明ずみ。』――某甲は拙者とか僕とか私とかの意でありしことは諸君の知らるゝ通り。』――話在、話をつゞけて居ります、と云ふこと。話がまだあります、

ではない。――

提講。

又かと思ふほど屢〻ある問答底であるが、雲門禪師の活手段は月並的ではない。其の蓋天蓋地底を我ものにせざるべからず。』玆に一僧あり、雲門禪師を訪問。門云く、「お前はこれまで何處に修行して居られたか。」問僧の答へ樣で其の力量を辨見しよう、と云ふ爲人度生の一作略。衲の如きも時〻此の眞似をやるが、意外に失敗することが多い。それは修行未熟であるがため。』――雲門禪師の如きは圓熟家の老古錐、百發百中。――僧、「私は今日まで蘇州の西禪禪師の處に居りました。」

と正直に答へた。正直に答へた處を見ると、此の僧尋常の者に非ず。或は雲門の手元如何と試みる底意がありはすまいか。雲門禪師油斷すると敗闕なさるぞ、と心配なさる閑人もあるが、心配無用。――門云く、「西禪禪師、このごろは如何なる話をしてをらるゝ。何か珍らしい高說を聞かされたか。」――此の問が所謂綿裡に針を包む、等閑觸着火星飛。――此の僧、こゝぞと思うて兩手を展べ、サア御覽ください。――萬象中獨露身と云うたつもりか。或は敢へて藏することなしと云うたつもりか。鳶凧が羽を披げた、そのまゝを呈出した。一寸、上手に働いた。されど禪家の飯を喫して居る者はこれ位のことは朝

飯前のお茶の子だ。其の手に乘る樣な雲門禪師ではない。電光石火、間に髮を入れず、門打つこと一掌。僧の横つらをピシャツと見舞うた。此の樣なことは何人にも出來ることであるが、雲門の一掌には風露の香がある。無眼子の亂打する一掌と同一視する勿れ。諸君、若し此の僧の如く雲門禪師から一掌を與へられたら何となすべき。考一考せられよ。――― 不意を喰つた此の僧、「禪師、私は話を申し上げてゐる最中であります。それを聞かずに私の横面を打つとは如何にも輕擧暴動ではありませんか。」と云うた。此の僧にしては上々の答である。されど第二流だ。――― 雲門茲に於て兩手を展ぶ。――― 斯くなければならぬ處。流石雲門禪師である。雲門の兩手展開と僧の兩手展開と是れ同か是れ別か。別の如くにして同、同の如くにして別。所謂、牛の飲む水は乳となり、蛇の呑む水は毒となる。――― 僧は雲門の兩手展開を見て啞然。これは拙僧の二の舞をしたな、と或は思うたかも知れぬ。衲ならば兩手展開を見て禮拜する。雲門は僧の無語底を見て更に一掌を與ふ。可謂好打。――― 實を云へば僧が雲門禪師の兩手展開を見て一掌すべきである。如何せん此の僧は機關を撥轉する力なきを。――― 或人は、其の知には及ぶべきも其の愚には及ぶべからず、と云うて僧に共鳴した。――― 若し雲門禪師の耳に恁麽の言葉が聞へたら、雲門

禪師、禪定より飛び來つて必ず一掌を其の人に與へしならん。」

◎頌

虎頭虎尾一時收、凛々威風四百州。却問不知何太嶮　師曰、放過一著。」

讀方

虎頭虎尾、一時に收め、凛々たる威風四百州。却つて問ふ知らず、何ぞ太だ嶮なる。師曰く、一著を放過す。」

字解、分解。

虎頭云々の一句、是は雲門禪師の活作略、其の機鋒峻嚴、意氣高邁なることを賞讃したものである。虎頭虎尾は前後左右始終。それらに於て一寸の間隙なき働。雲門禪師にあらざれば或は釋迦でも達磨でもなし得ざる、絶好絶倫のお手の内である。苟も禪僧たるものは斯くありたきもの。――凛々云々の一句、大丈夫、天に先だつて心の祖となる底の雲門禪師、其の威風凛々たる、豈支那四百州のみならんや。圜悟の垂示に云ひし如く、等閑に鐵を截り釘を斬り隨處に蓋天蓋地と。實に然り。然りと雖も恁麼は人々具、箇々圓。看よ人々の坐臥進退を。威風凛々たらざるなし。知るべし人々の喫茶喫飯を。凛々たる威風ならざるなし。要は此の者のあると無きとに依る。此の者とは何者ぞ。參じて知るべし。證して見るべし。――却問云々の一句

は雪竇禪師の意旨。多くの人は雲門禪師の手元は實に孤危嶮峻で近傍することが出來ぬと云ふが、果してさうであらうか、拙者は知らぬが、と學者に向つての釣言。(本則の僧にかけずに會下の大衆にかけて見る方が意味平穩である。) 知るべし、嚴師、好弟子を出す。父、嚴ならざれば、子、孝ならず。法に於て大自在を得、一切群生に大安樂を得せしめんと欲せば、サア諸君云うて見よ。―― 師曰、是は記者の言葉。―― 放過一著、云はぬが花。云はぬ處に云ふに云はれぬ妙味がある。是が雪竇禪師の慈悲徹悃、仁涙義血、滴々の處である。』

提講。

雲門禪師の學者を接得さるゝ樣子は虎頭虎尾一時收。その活作、活動、それは實に凛々威風四百州。―― 豈敢へて雲門に讓らんや。人々修行して生死を透出し來れば、斯の如く機關を撥轉するに何の難きことかあらん。問僧は雲門禪師の蓋天蓋地の威風に逢うて、某甲話在と云うた處は如何にも泰然たりであるが、實は盲蛇、無鐵砲である。若し問僧、玆に於て禮拜し去らば、流石の雲門禪師も、或は無語低頭歸庵であつたであらう。然らざるが故に雲門禪師をして兩手を展べさし其の上に亦一掌を振はせた。―― されど雲門禪師の慈悲は徹骨徹髓である。却、問、不、知、雪竇禪師、飜身一番して、「拙者は知らぬ。」

と。實は知つて居らるゝのであらう。是を反語と云ふ。問僧と會下の學者にかけて、サア嶮か不嶮か云うて見よ。――是は雪竇禪師の蓋天蓋地。等閑に接化利生なさるゝ底の一掌にして兩手展開。――結末に一句不足の處をのこし、一著放過、とやられたは流石雪竇禪師。是ぞ虎頭虎尾一時收、凛々威風四百州。――云ふ勿れ太嶮なりと。尚是れ一著放過。――

（昭和十三年十二月十日講演）

390
311

昭和十四年七月七日印刷
昭和十四年七月十三日發行

著作兼發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終